

ネパール・バングラデシュの農村

土井 時久*

キーワード：ネパール、バングラデシュ、灌漑農業、出稼ぎ

はじめに

1998年の11月から12月にかけてネパールとバングラデシュへでかけて農村調査をおこなった。北大の長南教授を代表とする文部省の海外調査プロジェクトである。以下はその時の調査そのものというより、それにまつわって見聞したことから地理に関係がありそうなことをまとめたものである。

はじめの2週間は、ネパールのインド国境により広がるタライとよぶ沖積平野で過ごした。ここは乾季に極端に雨が少なく、滞在した期間に一度も降雨がなかった。気温は作物生育に十分なのだが少雨のために休閑地が多くなる。海外からの農業開発援助の多くは灌漑施設を整備して乾季の畑作を促すのだがうまく進んでいない。最大の理由は乾季に農業用水入手する費用が高すぎることにある。

あとの1週間はバングラデシュである。ここはむしろ排水に苦労する。巨大なデルタに乗っている感じのするこの国ではイスラム文化の特質が随所に見られるが、本稿では農村の灌漑施設の普及にともなう地代のありかたの変化などについて紹介する。

1 揚水灌漑システム

インド国境に近づくと延々と灌漑水路が続いている。しかし、工事半ばで利用していない。聞けば、インドとの共同プロジェクトではじめたが、途中で条件が折り合わず工事は中断だという。それとは別にリフト・イリゲイションがあるから行ってみようという。Tinau川から電気のポンプで水をくみ上げて灌漑溝へ流し込んでいた。マルチャバールというところである。5年前に完成した。灌漑面積は2800haで3本の主要水路で水を

送っている。ところがここでも政府は財政負担にたえきれず、水利組合(強いて訳せばこうなるが、現地では Water Users' committee とよんでいる)が管理して年・ビガ¹⁾あたり160Rs²⁾の負担となっている。現在は電力費の90%を政府が補助しているが、今後は年々10%ずつ引き下げる方針だという。財政力の乏しいネパールとしては致し方ないのだろうが、これは一種の実験だと思う。年を追って農家の灌漑水負担費が重くなると、これが農業所得の増分を上回るようになる。そこで農家は水の利用をやめざるをえない。(Nov., 26, 1998)

2 タル族の出稼ぎ

皆さんのが休みをとってチトワン国立公園ヘエレファントライディングに出かけたあと、近藤先生³⁾と浅井戸の様子を見に出かけた。そこで出くわしたのが出稼ぎ労働であった。彼らは仕事の少ない250kmはなれた西方のダンから片道80ルピーのバス賃をかけてやってくる。男3人、女7人のグループで家族、親戚からなる。ここで25日くらい稻の収穫作業をしている。昔はここへインドからやってきたが、インドでの賃金率が2倍に跳ね上がったのでこなくなってしまった。たいていは女子が働く。自分たちで食事をつくり農家の土間でねる。賃金率は男女同じで一日60Rsである。彼らは田植のときもやってくる。国境をこえて労働者が自由に出入りする。そして土地をもつ農家と土地なし農民では雇い主と雇われるものとの決定的な差が生ずる。(Nov., 27, 1998)

3 浅井戸の事例

浅井戸の利用は Stagge III⁴⁾の南に拡がる。その要点をメモしておこう。名前は、ハリ・ラム・

* 岩手県立大学総合政策学部

ヤドル。さかんにポンプを動かしているのが目について車をとめた。きけば、昨日新しいエンジンに取り替えたばかりという。価格は21千Rs(4.2万円)。ポンプの周辺は野菜が多く縁につつまれている。彼の主な作物は、米、小麦、ポテト、マスタード、ブリンジャル(なすび)、トマト、チリで、経営面積は全部で10ビガである。つまり6.4haほどで自作農では大規模である。それが20キッタ、つまり20の圃場にわかかれている。かれはもう一つSTWを持っていて、もし圃場がまとまつていればかなりの面積に灌漑できるはずである。

ここで灌漑しているのは3キッタ4ビガで、水は余ってしまう。それで近所の農家に水を売る。価格は1時間当たり60Rsだった。畑を細分して野菜を作る。いま灌漑しているところは畳2~3枚で、その横にチリを植える予定とのことだった。

(Nov., 27, 1998)

4 浅管井戸利用の野菜生産

今回の補足調査で確認したかったのは、野菜生産のことである。バザールにはかなりの野菜が並ぶのだが、まとまった野菜生産の事例が見当たらない。ダカールさんにも聞いてみるのだが要領を得なかった。当初は、ハリハリプールあたりではカーストのせいで土地所有面積がせまくて野菜を栽培していると聞いたが、納得できるデータが得られなかった。大学院の柴君が修論の調査で大分まえから滞在して調査していたのだが、彼のテーマは土地なし農民の実態であって狭くとも農地を所有する人々とは住む場所が違う。

そこで、今回は浅井戸の多いサクワを重点的にまわって実際に野菜を生産している農家を聞きだして圃場図を実測によって作図しながら、水利用の実態を調べることにした。初日も二日目もこれはという事例に出くわさない。二日目の夕方、そろそろ宿舎へ引き揚げようかと思っていたら、やけに調子のよいおじさんがあらわれて「私はJADPに勤めていたことがある。研修で日本へ行き筑波や秋田へも行った。私の家でも野菜を作っているから明日くれば協力しよう」という申し出である。こんな農村部で英語をペラペラしゃべるおじさんが農業をやっているとは好都合。あした来るからよろしく、ということにした。彼は

Jagadesh Thakur (タクール) といい、住所はVDC, Sakuwa, Mahedranagar, Ward 4 である。さて、翌朝行ってみると自宅に招きいれいろいろ自分の経験を話し出す。聞いてもらいたい気持ちは分からぬでもないが、こちらは早く調査に取りかかりたい。総経営面積は2ビガ10カタで比較的大きい。野菜を作っているが、いわゆるキッチン・ガーデンで大部分は小作に出して米、小麦を作っている。分益小作で、肥料・農薬は折半し、生産物の50%を受け取る。折角だから全農地を実測し、記録した。今回は院生の合崎、小糸君に巻尺で測ってもらい大いに助かった。赤外線で距離を測る道具も持ってきたのだが電池が切れて使えなかった。おかげで彼らには雲古⁵⁾を避けながら炎天下で辛い作業をお願いすることになってしまった。

次第に南から北へ調査地をかえつつ移動していると、最後の日の午後になってようやく目指す事例に出くわした。タクールさんには期待しただが、彼の思い込みが激しくてこちらの願いはサッパリ伝わらずヤキモキしどうしだった。彼は、良いところへ案内するといってアウライ川の近くまで延々と歩かされた。行ってみるとかなり規模の大きい自然硫下式の灌漑地域で、それはそれで当方の認識不足を補ってくれて助かったのだが、野菜とは無縁。タクールにタックルを掛けられた感じだった。結局二日間は昨年までの調査の再認識で新発見ではなかった。だんだん北へ向かって、とうとう深井戸が卓越するハリハリプールまで来てしまった。調査のたびに必ず通るお寺と小学校が並んでいるところへきて、馬鈴薯のマルチ栽培の事例を記録して、いくらか集約的かなと思ってさらにお寺の西側の道路を北へ進むと驚いたことに全部の農家が軒並みに野菜を自家用ではなくまさに商品として栽培している一角がある。我々の仮説では、こんな農家があるはずだ、なぜないのか?と不思議だった。ようやく疑問が氷解したように思った。それで最後の日(12月4日)はここを集中的に調べることにした。わずか数百メートルの道路沿いに並ぶ50戸ほどの農家の姓はマンデル、モハト、ヤダフのいずれかでヤダフは家畜を飼うカースト、モハトは野菜を作るカーストだという。私たちはカーストと職業に密接な関係があるとは

聞いていたが、これほどとは認識していなかった。このなかに浅井戸を持っているのが3戸ある。他是ここから水を買って野菜を作る。大部分の農家は雨季に米、乾期に野菜を作っている。ようやく幻の農家群に会った気分がして補足調査はまずまずの成果となった。これを社会学的に観察したらどんなことが言えるのだろうか？専門家にお聞きしたい。

サンプリング調査でランダムに農家を選んでは聞き取りをしてきた昨年までの方法とはちがうケース・スタディもまた大切だと思い知らされた。ここには土地を持たない農家が2戸ある。そこで聞き取りをしたら、1戸は母一人子一人であった。息子は Jabsi Mohato, 40歳、母は65歳。息子は啞だった。昔、インドから移住した当時は父親もいたが病死し、市民権もない。選挙権なし、正式な土地所有の手だてもない。納税の義務がない代わりに何の権利もない。実はこういう市民権のない住人がここでは半数に達するという。政府はインドからの不法移住者にも一定の条件を満たせば市民権を与えるが、財政負担の増加を恐れて容易に認めようとしない。この Jabsi 親子は住んでいる家の外觀からしても貧困の極みで、周囲の人たちが簡単な仕事をさせて幾許の米を与えたりする程度だという。「この家は雨が降ると中まで水浸しになるんだ」と説明してくれる。雨風をしのぐにも事欠く（ここではほとんど家に電気もない）家で親子は雨の日にどうしているのか？Jabsi さんは膝まづいて僕の靴に手を置く挨拶をした。こんな挨拶を受けるのは初めてで、昨年、ジャナクフルの空港で大臣を迎える地元の人たちの一部がこういう挨拶をしているのをみたことを思い出した。歩いて30分くらいの範囲にかなりの農地をもって小作させる農家があり、バラボラアンテナもあるかと思えば、他方にこんな暮らしを余儀なくされている農家もある。（Dec., 4, 1998）

5 パン引きの少年

バングラデシュでの最後の調査は、South Chamuria 村でおこなった。農村ではリキシャウにかわって座席部分が1.5mと1.3m四方くらいの板が固定されたパンが多い。これだと人だけでなく荷物も運びやすい。

藤田さん⁶⁾のフィールドである村へ出かけるときは、このバンにのっていった。自動車では無理な道を20分ほど乗った。運転手は日本の中学生くらいの男の子。かれらのバンに大人3人ずつが乗る。平坦なところは自転車をこぐ要領だが、幾分上り坂やデコボコになると彼はおりて玉の汗をかきかき引っ張る。それはもうたまらなく可哀相で下車して後ろから押してやりたくなる。いや、一度ならずそうした。で、賃金は30タカ(100円くらい)である。二人のバン引きは悲しそうに「もっと出して頂戴」といっているのは顔でわかる。すると Jaim さん⁷⁾は、「この客の中にはバングラ人が二人いる。これで充分だよ。」とでも言っているように僕には思えた。バンの借り賃に半分もっていかれるから、彼らの稼ぎは50円程度であろう。学校にも行かず、こんな暮らしで日をおくる。文盲率は50%くらいだそうで、スラムの子供や働く子供はこうして大人にならざるをえない。（Dec. 11, 1998）

6 機織りの村にて

ここは藤田さんが JAICA 専門員として滞在したときのフィールドでもあって色々な情報を得た。

この村では盛んに機織りをしていた。糸はよそから持ち込み、これを布に織る作業、染色作業を経てサリーなどに仕上げる。バッタン・バッタンという音がどこでも聞こえる。行ってみると小さな女の子からおばあさんまでの共同作業である。我々が珍しいせいか、面白がって写真を撮るときも協力的である。男の子はこの作業をしない。ついてきてベンガル語を教えてくれる。キャベツはコピ、かぼちゃはナイガスなどなど⁸⁾。

Sohadebpur Union, Kakihat Upazia が正式な地名で、話を聞いたのは、KS Khalilur Pahmen さん。69歳で、教育を受けた年数は10年。職業は僧侶兼農業。16人の家族（複数の妻がいて子供も多い）。

この村には20年以上も前から深井戸が2個所あって、ここ15年くらいの間に浅井戸が急に増えている。20年前には1個所に過ぎなかったが今では19本もある。

彼の所有地は6.6acre で、借り入れ地が1.0acre,

モーゲジアウトが1.65acre だから経営地は5.95 acre となる。この経営地すべてで灌漑が可能である。

小作料は現物で支払う。地主との分配比率は、マスタードでは、50：50、ボロ（乾季稻作）では、生産物の25%は灌漑費用として差し引かれ、残りを地主と小作人が50：50に分ける。アモン（雨季の稻）では生産物を50：50に分ける。彼は、1985年に農地を売って資金を準備して38,000TK の総費用（ポンプと掘削費）で電動7.5馬力の浅井戸を設置した。灌漑面積は、1994年、10.89acre、1995年、9.75acre、であったが、その後住宅建築のため面積が減って8.85acre となっている。

灌漑をする前の作付けは、Kharif に B. Amon, Rabi I に在来種の豆類、Rabi II, Aus が一般的。Aus の収量は 9 md/ha, Amon は 15md/ha, ジュートは 15md/ha 程度であった。他にレンティル、9 md/acre, キャシャリ（豆）、18md/acre。

灌漑をするようになってからは、Amon は直播から移植にかわり、収量は 15md に増加し、乾期には HYV の IR-8, pujan, BR-11 が導入され、収量は 40md/acre とかなり高い。マスタードも HYV で 9 md/acre である。Boro の場合、灌漑水の費用として 1979 年以前は acre 当り 100TK を支払っていたが、総収量の 1/4 を受け取るようになった。このように、農業技術の変化が水利費の負担や地代のありかたに変化を齎している。

浅井戸所有者の費用・便益をみよう。水利費は米で受け取るが、彼の場合それが金額にして 18,750TK (75md * 250TK)，それに自分の水田に利用する分を計算すれば 8,277TK となって合計 27,027TK である。費用は、燃料（ディーゼル）が Boro の季節合計で 14,000TK、水路維持費用が 1,500 TK、ポンプの運転は息子が担当し、一日 50TK で 90 日働くとして 4,500TK だから、合計 23,700TK となる。浅井戸に投資して水を賣るのは充分採算がとれるとみてよかろう。バングラデシュでは政府主導の深井戸灌漑から民営化を促進して小規模灌漑が増加している。

農業の雇用形態にも変化がみられる。以前は年雇・日雇いがあったが現在では Boro に関して現金支払いの雇用が一般的である。賃金は田植で 700 TK/acre、収穫は 1,000TK/acre である。日当では

なく、出来高払いとなっている。作業時間が 7：00～13：00 というのもネパールと異なる。(Dec. 11, 1998)

おわりに

還暦をすぎた身には 3 週間の途上国調査旅行は、かなりくたびれたのは確かだが、収穫も大きかった。何回か出かけているうちに論文は別として旅行記というか調査こぼれ話というか、そんなものを書くのが楽しくなって、それなりの要領を少しばかり会得したように思う。

まず、胸のポケットに紙片を突っ込んでおくこと。ウェスト・ポーチにボールペンを入れておくことだ。そして、これはと思った出来事を大儀がらずにメモする。海外旅行では荷物を 4 個所に分けて移動する。なくなても仕方がないものは大きな車付きのカバン。頻繁に出して使いたいものは背中のザック。第 3 がウェスト・ポーチで、これにボールペン、名刺、ルーペ、薬、財布、パスポートの番号など機内で必要な情報を書いたカードなどを入れる。死んでも離せないものは下着とシャツの間に首から下げた袋の中で、パスポート、航空券が入る。

次に欠かせぬのがモバイルで、これはザックの下に入れておく。僕のザックは一番下がファスナで区分されていて、ちょっとした時間や機内で簡単に取り出せる。海外旅行、それも途上国では予定どうり飛行機がとばない予定になっているから、メモ書きの紙片を取り出してモバイルに打ち込む時間が結構ある。紅茶でも飲みながらカチャカチャやっていると 30 分で一日分は打てる。後半はくたびれてカチャカチャが減るけど、帰国したときに半分ほどできている。あとは証拠書類（ボーディングパス、レシート、新聞記事の切り抜き、調査ノートなど）を手がかりに duty free shop で買った酒を飲みながら補足的に打ち込む。例年、これが正月の仕事で、ついつい本来最優先でなすべき論文作成のための作業が後回しになって記憶が曖昧になる。これではいけないのだが……

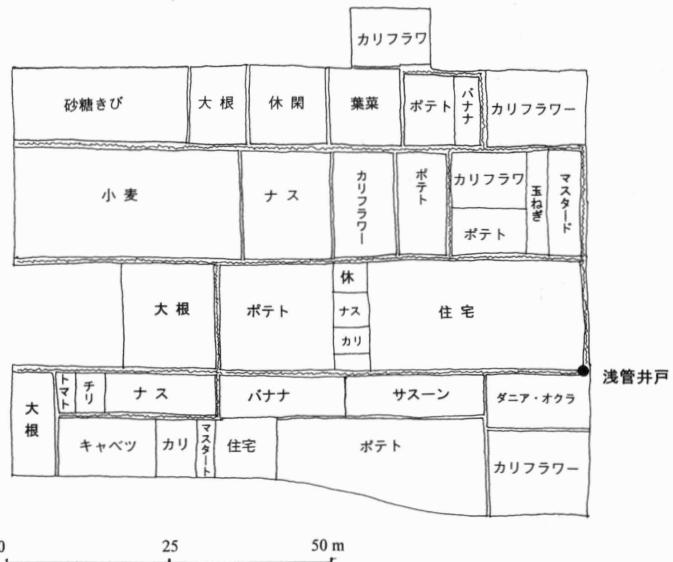
農業経済学というより、ネパールで見えてくるのはもっと広い人々の暮らしである。研究課題だけに関心を限定していると見えるものも見失うのではないかと思う。日本だけを見ていると気が付か

ぬ問題がネパバンで見せつけられるようでもある。年に一度、ほんのチョット覗き見をするのだが、それなりの収穫はある（ように思う）。

To be or not to be, that is the question と言いますが、それはハムレットの幸せな悩みで「アフリカをはじめ世界のいたるところで、とにかく今日を生きる、明日を生きるということに汲々として、いかに生きるかなど考えられない人々が無数にいる。そのこと自体が現代のテーマ⁹⁾」だという意見に同感です。ネパールの農家の人々にインタビューしているとそんな気がします。

注

- 1) 0.64ha.
- 2) ネパールの1ルピーは約2円に相当。
- 3) 北海道大学農学研究科。
- 4) この地域の世銀による開発援助は、ステージのIからIIIと段階を踏んで進められた。この開発援助地域の上流部には伝統的な自然流式のチャティスモジャ灌漑地域があって、村落共同体による灌漑管理がなされている。
- 5) 人糞。
- 6) 京都大学東南アジア研究センター。
- 7) バングラデシュ農科大学。
- 8) 他に、鶏はムロク、やしの木：ナイキルガス、家：ムニ、糸：シユケ、窓：ザラ、羊：ペアラ、牛：グル、ボールペン：コロ、水：バニ、靴：ジュトウ、ズボン：ブルーペン、米：チャゴル、小麦：ゴムなどを聞いた。
シャツはシャツだった。
- 9) 五木 寛之(1998)他力、講談社、p.95。
- 10) 早川直瀬(1923)養蚕労働経済論、同文館。



付図 ネパール・タライ地方の小規模野菜作農家の圃場

Janakupur, Hariharpur Ward 2 の Giraja Mohato の圃場。0.56ha の規模で、この地域の自作農家としては小規模である。自作農の平均規模は1.5ないし2.0ha くらい。この農家は数馬力のディーゼルで地下水をくみ上げて野菜作をするほか、近くの農家に水を売っている。狭い圃場の中に縦横に水路が引いてある。ポテト、小麦にも灌漑。経済的に裕福なほうの農家である。

インドから不法入国した住民は市民権もなく土地をもたぬ場合が多い。彼らが自作農への低廉な労働力供給源となっている。この事例のような小規模経営はカーストと関係しているようで、名前も共通して Mohato のほか Yadav や Manndal 姓がほとんどであった。図中で一般的な畑作物は小麦で、バナナを除けば野菜がほとんどである。雨季になるとバナナ畑以外は水田になる。野菜は乾期のみの2~3作に当たられる。

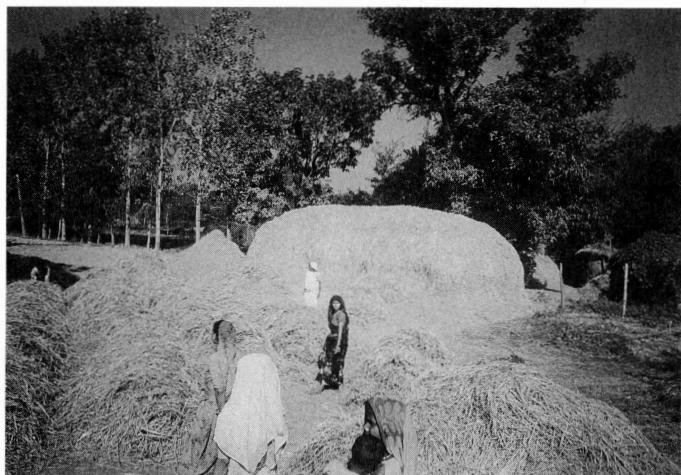


写真 タルー族の農業出稼ぎ

ネパール・インドの国境は事実上相互に自由に出入できる。数年前はインドの日雇い賃金率は低く田植えや収穫期にインドからタライ地方への出稼ぎがあったが、最近は写真にみるような出稼ぎはネパール西部からやってくる。インドの賃金が上昇しているという。農業生産や他の経済の変化が労働力移動を変えるのだが、その詳細は不明である。重要な研究課題だと思う。

わが国でもかつては農業労働での移動があった。養蚕のための移動が典型事例である¹⁰⁾。